

令和 2 年 6 月 21 日現在

機関番号：32689

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2015～2019

課題番号：15H03226

研究課題名(和文)日本人英語学習者のインタラクション(相互行為)を通じた自律的相互学習プロセス解明

研究課題名(英文)Autonomous Mutual Learning through Interactions among Japanese Learners of English

研究代表者

原田 康也(Harada, Yasunari)

早稲田大学・法学大学院・教授

研究者番号：80189711

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 12,700,000円

研究成果の概要(和文)：日本人英語学習者のインタラクション(相互行為)を通じた自律的相互学習プロセスを解明するため、学習者の相互行為に基づく英語学習の様子を、ビデオカメラ・アクションカメラ・全天周カメラ・ICレコーダなどを組み合わせつつ、大学生を主な対象としてデータ収集を進めた。研究代表者が担当したデータ収集は毎年60～80人を対象に3人程度のグループに分け、「応答練習」などの学習者にとって意味のあるやり取りを英語で行う活動に毎週30分ほどを割り、その活動状況を年に30週分収録したため、参加者間の同調や引き込みなどを大量に含むインタラクションの生データが5年間でおおむね1,800時間分ほど蓄積されたこととなる。

研究成果の学術的意義や社会的意義

今日の大学英語教育の現場においては、批判的思考力の涵養を一つの目標として、資料の読解や音声・動画資料の聴解などを批判的に行いつつ、即時的あるいは比較的厳しい時間的な制約の中で、口頭で自分なりに整理をして意見を述べたり、他の学生の発言に対してコメント・質問するというような形態での授業が求められている。こうした比較的高次の思考能力を求める活動が、英語の語彙・文法などの知識の獲得と学習者がすでに持っている英語に関する知識の実践的な運用にいかにつながるかの理論的・実践的検討にはまだ不十分なところがあるが、本研究計画による「応答練習」と作文を中心とした活動の記録によって、学習過程の一端が明らかとなった。

研究成果の概要(英文)：In order to elucidate how Japanese learners of English actually learn from each other through meaningful oral exchanges in English, we recorded learners' activities in what we call "oral response practice," in which learners are organized into groups of three, and one of them would read aloud a question printed on a small card (twice to make it easier for the other parties to understand) and another would have ten seconds to think and 45 seconds to respond to it, and the third one would serve as the "time keeper" and "recorder" with a video camera or an IC recorder or a 360 degree video camera in hand. After a response is given, the three parties each evaluate it and then exchange their roles. Each year, about 60 to 80 learners forming 25 groups or so engaged in this activity every week for 30 weeks and five years of this project culminated in about 1,800 hours of those recordings that include rich instances of lexical and syntactic priming, synchronization, attunement and entrainment.

研究分野：認知科学・統語理論・形式意味論・教育言語学

キーワード：インタラクション(相互作用) 自律的相互学習 プライミング 同調 共感

## 1. 研究開始当初の背景

大学卒業時に『仕事で英語が使える』ためには、英語の文法・語彙の知識定着と運用の自動化、発音・リスニング能力の向上とあわせて、英語で意思疎通・情報交換を行う態度が重要である。大学では、学術的内容について情報を整理して発表し意見交換を行い、文書にまとめるといった学術活動において英語を使用する訓練が求められている。しかし、こうした活動が英語の文法・語彙の習得にどのように貢献するか、必ずしも実証的に明らかにされていなかった。

第二言語習得研究では「理解可能な大量のインプットが言語習得を促進する」というインプット仮説 (Krashen, 1980)・「アウトプットが言語運用の自動性を高める」というアウトプット仮説 (Swain, 1985)・「コミュニケーション場面における意味のやりとりが特定の言語形式の習得を促す」というインタラクション仮説 (Long, 1988, 1996) などが提唱されてきた。Tomasello (1995) は共同注意が母語獲得に重要な役割を果たすとし、Pickering and Garrod (2004) は同調理論を提唱している。心理言語学研究で言語産出の基底にあるメカニズムを解明するための実験に多用される統語的プライミング (言語処理プロセスにおいて直前に処理した文と同じ統語構造パターンを用いる傾向; Bock, 1986) は、対話の中では話し手の使用した構文を聞き手も使用する傾向 (Levett & Kelter, 1982) として現れるため、言語産出を通して第二言語・外国語の学習者の統語構造学習や統語処理能力向上に利用できる可能性が指摘されていた (McDonough, 2006; Morishita, 2013 ほか)。

研究代表者は基盤研究 (B) 『学習者プロファイリングに基づく日本人英語学習者音声コーパスの構築と分析』(2006~2008年度) ならびに基盤研究 (B) 『属性付与英語学習者発話コーパスの拡充と分析: 大学新入生英語発話能力の経年変化調査』(2009~2013年度) の研究活動の中心的課題として、日本人大学初年度生を対象とする英語の授業の中で受講生を3人ずつのグループに分け、一人が(あらかじめ用意された)英語の質問を(2回)読み上げ、一人がこれを聞いて即座に口頭で応答し、回答後に相互評価するという学習活動を継続してきた。

「仕事で英語が使える日本人の育成」のためには、英語による意思疎通・情報交換を柔軟に実践できるだけの言語知識の獲得と運用能力の涵養が前提となる。研究代表者たちの研究から、日本の大学で学ぶ比較的学力が高いとされる英語学習者について、語彙・文法の知識を測定する Oxford Quick Placement Test (OQPT) とリアルタイムでの音声言語処理能力を測定する Versant English Test (VET) のそれぞれのスコアから換算した CEFR (Common European Framework of Reference for Languages) レベルを比較すると、後者が前者を1~2レベル下回り、語彙・文法の知識に比して口頭言語処理能力が低いことが確認できていた(原田・森下, 2013)。大学入学時に語彙・文法の知識をそれなりに習得していても、理解・産出の自動化に至っておらず、即時的な応答など時間的制約の大きい課題において、習得したはずの言語知識を活用できない状態にあり、大学の英語教育においてこれを改善することを目標とした。

## 2. 研究の目的

『グローバル人材育成』が大学教育の課題となる中、卒業時に『仕事で英語が使える』レベルに達するためには、文法・語彙の知識の定着と運用の自動化、発音・リスニング能力の向上と並行して、英語で意思疎通・情報交換を行おうとする態度の育成が重要である。基礎的な知識の習得や運用能力の向上に注力すべき中学校・高等学校での英語教育と比較すると、大学英語教育では、学術的な内容について情報を整理して口頭発表を行い、その内容について意見交換を行い、これを文書にまとめるといった学術活動において英語を使用する訓練も必要である。しかし、こうした活動が英語の習得にどのように貢献するか、必ずしも実証的に明らかにされていなかった。本研究はコミュニケーション活動の中で英語の語彙や文法に関する知識がどのように定着し、その運用能力がどのように向上するかを実証的に解明し、相互行為(インタラクション)に基づく自律的相互学習の実態を明らかにすることを目的とした。

本研究では、学習者3人ずつの小グループで行う応答練習をビデオカメラ・ウェアラブルカメラ・全天周カメラなどで記録し、学習者間のインタラクション(相互行為)について心理言語学と相互行為言語学の観点から分析し、自律的相互学習の実態を解明することを目指した。

これまでの研究で収集・書き起こしを行った応答練習のデータを見ると、応答で使用される語彙は大部分が質問で使用された語彙で、語彙的プライミングが質問から応答へと生じていることは明らかであった。語彙的プライミングに加え、統語的プライミングの実態について調査し、インタラクションによる統語学習を検証することを目指した。相互行為言語学の観点からは、フィルターの使用など発話の談話分析に加え、学習者の相互のアイコンタクト・表情とフィルターやイントネーションも含めた感性的な音声言語情報からインタラクション(相互行為)の共感性についての情報を抽出する可能性を検討することを目指した。

## 3. 研究の方法

英語学習者の「応答練習」におけるインタラクション(相互行為)を記録し分析するため、ビデオカメラ・ウェアラブルカメラ・全天周カメラなどを参加者の人数に対応できる数だけ用意しデータ収集を行った。収録したデータの一部に対して書き起こしならびに会話分析の観点からの各種アノテーションを付与した。また、書き起こしの分析から、語彙的プライミング・統語的プライミングが生じているか検証した。学習者間のインタラクション(相互行為)について分析し、学習者の自律的相互学習の実態を解明するための基礎的なデータとした。

## 【各年度の研究計画】

### (1) データ収集

(1.1) 調査対象として研究代表者が日常的に接する英語学習者（毎年 60～80 名ほど）を中心とし、連携研究者・研究協力者が日常的に接する英語学習者を随時加えた。ウェアラブルカメラは 2015 年度に機種別の検討を進め、収録音声が多チャンネルで高音質であることから SONY アクションカム HDR-AZ1 を選定し、早稲田大学で想定される最大の同時参加者数まで用意し、既存のビデオカメラと並行しての運用を始めた。神戸学院大学では別途学内予算等で購入したウェアラブルカメラの運用を開始した。2016 年度秋学期に琉球大学に SONY アクションカム HDR-AZ1 を移送し、2017 年度から試用を開始した。早稲田大学では 2016 年度末に HDR-AS50 を用意し、2017 年度から運用を開始した。一方、既存のビデオカメラのバッテリーとワイヤレスマイク・受信部の不具合が頻発するようになり、ビデオカメラにかわる機材が必要となり、全天周カメラの使用について検討した。学習者相互のアイコンタクト・表情などからインタラクション（やり取り・相互行為）の共感性についての情報を抽出することを目指して、2017 年度末に 360 度全天周カメラ RICOH Theta V と 3D マイクアンプ audio-technica TA-1 について検討し、2018 年度後半にはそれまでのビデオカメラから全天周カメラに運用を切り替え、2019 年度には通年でこれを使用した。ビデオカメラ・アクションカメラ・全天周カメラの運用上のそれぞれの課題と利害得失については研究集会で報告している。

(1.2) 早稲田大学での調査対象の英語学習者からは、コンピュータ教室で作成する文書や口頭発表用のスライドについて、電子ファイルで収集した。集積・分析するデータは、アンケート回答・各種試験スコア・作成する文書やプレゼンテーション資料の電子ファイル・授業時のコミュニケーション活動の音声動画記録など個人に関わる情報で、取り扱いに著作権・肖像権など慎重な対応を要するため、同意書の提出を受け独自の識別子 (ID) を用いて整理した。

(1.3) 参加者の個別の英語学習到達度を測るため、2015 年度から 2018 年度までの参加者は OQPT (Oxford Quick Placement Test)・VET (Versant English Test)・VWT (Versant Writing Test) を年複数回受験し、2019 年度は My Ardor English の Placement Test を受験した。

### (2) データ分析

収録データの一部について、河村まゆみ（研究協力者：言語アノテータ）と栗原奈な子（研究協力者：言語アノテータ）が書き起こし・アノテーション作業を行った。応答練習の生データは毎年 30 分 × 25 グループ × 30 週 = 375 時間、5 年間で 1,800 時間前後となるため、本研究計画の予算規模ではすべてについて人手で書き起こしをすることは到底できない。会話分析のアノテーションは単位発話あたり 10 倍以上の手間と時間がかかるため、処理できるデータは限られている。自動音声認識・自動画像認識などの技術的展開を注視しながら、将来的な自動化に備えて研究開発動向の調査も並行して進めたが、今後の進展を待つ必要がある。

### (3) 研究経過の報告

国内では日本英語教育学会・日本教育言語学会合同開催年次研究集会・電子情報通信学会思考と言語研究会・日本認知科学会・次世代大学教育研究会・日本ビジネスコミュニケーション学会・情報コミュニケーション学会などが開催する研究集会等で研究発表を行ったほか、年度により 12 月ごろに早稲田大学にて複数の科研費の研究成果報告のための合同研究集会を開催した。国際会議としては AMLaP (Architectures and Mechanisms for Language Processing)・EuroSLA (European Second Language Association)・RELC International Conference・JWLLP (Joint Workshop on Linguistics and Language Processing)・Asia TEFL International Conference・ICPEAL (Conference on the Processing of East Asian Languages)-CLDC (Conference on Language, Discourse, and Cognition) などでの研究発表を継続的に行った。なお、2020 年 3 月に Singapore の RELC での研究発表を予定していたが、新型コロナウイルス感染拡大の影響で開催が 1 年延期となった。

## 4. 研究成果

### (1) 英語学習者のインタラクション（相互行為）のデータ収集と分析

日本人英語学習者のインタラクション（相互行為）に基づく英語学習の様子を、ビデオカメラ・アクションカメラ・全天周カメラ・IC レコーダなどを組み合わせつつ、大学生を主な対象としてデータ収集を進めた。研究代表者が担当したデータ収集では毎年 60～80 人を対象に 3 人程度のグループに分け、「応答練習」に毎週 30 分ほどを割り、年に 30 週分収録したため、5 年間で 1,800 時間分ほどのインタラクション（相互行為）の生データが蓄積されたこととなる。

### (2) 英語学習到達度・英語流暢性の多様性の再検証

大学入学者の英語力は多様である。入学試験を取り巻く状況とマスコミなどによる報道から、特定の大学・学部への入学者は「偏差値」的に輪切りされ、「学力」の幅があまり大きくないように思えるかもしれないが、入学後の実態はこうした見方とはかけ離れていることを英語担当教員は日々実感している。学力試験に基づく入学試験を経て入学してきた学生に限定しても、複数科目の合計点で合否が判定されるため、中学・高校と英語が比較的得意で熱心に勉強してきた学生もいれば、英語が苦手な最低限の勉強しかしてこなかった学生もいる。学力試験に

基づく入学試験のほかに、付属校・指定校などからの推薦入学者・そのほかの推薦制度による入学者、いわゆる AO 方式による入学者など、英語の学力を直接的に問われることなく大学に入学する学生も増えており、この中には中学・高校で学ばべき英語の語彙・文法・4 技能の運用能力を十分に身につけずのまま入学してくる学生もいる。他方、いわゆる帰国生向けの入学試験を通じて入学する学生に限らず、英語圏または英語を媒介言語とする学校での学習を複数年または長期にわたって経験してきた学生も増えている。

2015 年度から 2018 年度の実験参加者は Versant English Test (VET)・Versant Writing Test (VWT)・Oxford Quick Placement Test (OQPT) の paper and pencil version を受験した。特定の大学・学部の 1 年生のデータであり、スコアそのものを広く日本の英語学習者全体に一般化はできないが、VET については 2000 年度から 2018 年度まで、学部新入生の 10% 弱が毎年ほぼ同様のスコア分布と年度内変化の傾向を示しており、この学習者集団の傾向を示すところある程度までの確信をもって言える。2015 年度には 62 名を対象として VET と VWT を各 4 回、OQP を 3 回実施した。VET と VWT を全て受験した学生 53 名を対象として各テストのスコアを CEFR レベルに換算し、受験月別に分布をまとめると、学年初めには VET では大多数 (85%程度) が A1 と A2 レベルにあるが、VWT では大多数が A2 と B1 レベルにあり、回答が選択式で言語産出を必要としない OQPT では B1 と B2 レベルにある。VET のスコアに基づく CEFR レベルの分布は年度初めでは A1 と A2 で全体の 86.7%を占めていたが、12 月では A2 と B1 が 86.8%を占め、習熟度の向上が観察される。VWT では、年度初めは A2 と B1 が 90.6%を占めて、そのうちの 60%以上が A2 だったが、年度末になると B1 レベルの学生数が 56.6%まで増加し、VET と同様に習熟度の向上が観察される。OQPT のスコアと CEFR レベルへの換算結果からはこのような年度内の変化は見られなかった。

2015 年度に収集したスコアから換算される CEFR レベルについて、VET より VWT が 1 レベル上と判定される理由は特定できていないが、1990 年代から国立大学入試に広まった英語「自由英作文」の washback と推量するのが妥当であると今のところ思われる。一方、過去 18 年にわたって継続的に取得した VET のスコアからはセンター試験リスニングセクション導入の washback は明確には見られない。年間でのスコア向上については VET では標準測定誤差をかなり超える程度であるのに対して、VWT では比較的明瞭な上昇が見られる。対象となった学生は年間を通じて毎週 90 分の授業時間の中で 30 分弱の応答練習に加えて 20 分弱の小グループでの発表と質疑応答の課題を繰り返すが、英語の産出に用いる授業内の時間をそれぞれの学習者について計算すると高々 5~7 分程度であり、授業時間外の練習は一般的には期待できない。作文については授業時間内に隔週で 20 分から 30 分を費やし、宿題として 1 時間から 6 時間ぐらい費やす学生がいることがこうした相違につながった可能性が考えられる。

### (3) 効果的で円滑な言語コミュニケーション

効果的で円滑な言語コミュニケーションは質問と応答の連続によって進む。近年の英語教育の現場ではコミュニケーション活動に基づく指導が求められているが、教科書でどのような疑問文に触れるか調べてみると、入門期の対話的教材の中で簡単な構文の疑問文に触れるものの、語彙・構文の学習が進んだ段階で複雑な内容や構文の疑問文を系統的に学ぶ機会がないため、対話的場面において相手の発言内容に即して的確な質問をする能力の涵養に結びついていない。

「応答練習」の録音を観察すると、質問に対する応答などの自発的発話において、発話単位の最後(文末や句末など)の音節の母音(子音で終わるべき単語のときは母音を挿入してこれ)を延伸して発音するという現象が顕著に見られた。質問文の読み上げと比較すると、母音(挿入)延伸は自発的発話の際立った特徴であり、日本語と英語の音韻構造の違いによる学習上の困難だけに起因するものではなく、母語である日本語の談話方略の転移であると推定される。疑問文の節末・文末の抑揚(上昇・下降)、単語レベルのアクセント、基本的な単語の母音の発音(allow・won など)、カタカナ語の影響(choice を動詞として使う・virus をウイルスと読むなど)、4 桁以上の数字の音読など、中学校・高等学校で学習しているはずの知識が十分に定着しておらず、運用に結びついていないことを示すさまざまな事象が明らかになった。

「応答練習」は耳で聞いて理解した英語の質問に対して直ちに口頭で英語の回答をするというリアルタイムでのインタラクションのための基礎訓練である。参加学習者の大部分は、学年の初めには「応答練習」で質問に答えようとしても質問が理解できない・何を答えたらよいかわからない・答えたい内容を英語で表現できないということで呆然としていることも多いが、学期の終わりにはそれなりにまとまった答えを返すことができるようになってきている。質問に対する回答はプライミングが最も現れやすい環境であり、応答に使用した語彙の多くが質問に使用された語彙であるなど、語彙的プライミングが生じている。何度も同じ表現・構文に出会うことには言語発達の初期段階に必要とされる模倣と反復による学習効果があると考えられる。

### (4) カタカナ語の英語学習への影響

現代日本語の文書作成において、ひらがな・カタカナ・漢字は極めて巧みな機能分化により、効率的な文字コミュニケーションを支えている。漢字は主に体言(固有名詞を含む名詞)・用言(動詞・形容詞・形容動詞)の語根・語幹に用いられ、ひらがなは助詞・活用語尾など文法的関係を示し、カタカナはオノマトペ・(ヨーロッパ言語からの)借用語・動植物の学名など、音そのものを表すのに用いられていた。英単語に由来するカタカナで表記される外来語は現代日

本語で広く使われているが、英語学習に対する良い影響として、英単語に対するなじみ・親密度を高めている。単語親密度とは、見たり聞いたりしたときにその単語を知っていると思う度合いであるが、横川ほかの調査でも「親密度の高い語の・・・特徴として・・・特に目立つのは、外来語としてのカタカナ英語で使われているものが多い」としている。しかし、カタカナ語の影響によると思われる英語の発音の間違い・文法的な間違い・語義に対する誤解・慣用からの逸脱など、英語学習にとって以下のような様々な悪影響が見られることも確かである。これまでの研究で蓄積した学習者データにも、英語の文章ならびに発話のなかに、カタカナ語の影響と思われる誤用が見られる。

(4.1) 発音：bat を「バット」、ball を「ボール」のように、カタカナ語の影響により強い癖を伴って発音される単語が数多くある。学生が英語を学び始める前に覚えた外来語としてのカタカナ語の発音は日本語としての発音であり、一度覚えてしまった日本語としての発音を忘れて英語として適切な・通用する発音を身につけることは、大学生となると極めて難しい。

(4.2) 単語の文法的特性の間違い：学生の比較的自発的な発話や丁寧な推敲を経ていない作文を見ると、「チョイスする」という日本語から *choice* (名詞) を動詞のように捉えて *choiced* と過去形にして英語の文を構成する例がみられる。マイカー・マイホーム・マイルール・マイブームなど、マイで始まるカタカナ語は多いが、英語の *my car* と日本語の「マイカー」を同じような意味であると誤解して、学生同士のコミュニケーション活動で “Do you have *my car*?” というような質問を屈託なく相手に問いかけるのを見ていると、英語母語話者に対し時どどのような誤解を与えるか、大いに懸念される。

(4.3) 語義・慣用のずれ：カタカナ語とそのもととなる外国語・日本語の単語が混同されることによる英語学習に対する悪影響もある。英語の *image* と日本語の「イメージ」などの語義のずれや、日本語で広く使われる「メリット・デメリット」を英語でもそのまま *merit / demerit* とすることで慣用とのずれが生じるなど、英語として慣用的でなく不適切な表現がみられる。

## (5) 英語学習を通じた情動的側面の変化：多重知能・ストレス尺度など

一般的に、大学生生活において国内または海外での研修やインターンシップ・ボランティア活動・留学など、日常的・定常的な学校生活から離れた活動経験は、他者・コミュニケーション・世界に接する態度に変化をもたらし、外国語や専門分野に対する学習意欲を飛躍的に高め、世界観・世界認識の変容を通じて学習ならびに日常生活における行動変容をもたらす可能性がある。しかし、研修・課外活動・留学等のこのような認知的・情動的側面に着目した研究は発展段階にあり、以下の3点を中心に認知科学的観点からの検証が必要である。

- 参加者の技能・能力などの変化・向上
- 参加者の対人関係認知の変化
- 参加者の対人行動の変容

学期末・年度末の「応答練習」では学期中の学習活動について振り返り、何が楽しくて何が難しかったか考え直すための質問を用意し、「応答練習」のあとに400語ないし500語を目標に振り返りの作文にまとめて提出してもらっている。多くの参加者が繰り返し言及するのは、高校まで、あるいは大学受験に向けた英語学習との違いである。他の学習者の考え方を知り自分の考え方の違いを発見することが、大学生にとって大きな楽しみにつながり、この楽しみがあるために英語で話すこと・聞くことに意欲を持ち、英語を自ら積極的に学ぼうとする態度につながるということを確認して述べる作文も多くみられ、「応答練習」を継続することで、談話の楽しさを中軸として自己表出・相互理解の経験を通じて英語によるやり取りの楽しさを実感し、これを動機付けとして英語の継続的な学習の習慣を獲得する様子を観察することができる。

今後の研究と実践では、学習者の言語知識・運用能力に加えて、動機付け・学習意欲・外国語不安・対人ストレス・自己効力感・コミュニケーションへの意欲など、さまざまな情動的側面に着目しつつ、「応答練習」を中心とした授業の効果と副作用を検証することが求められている。また、これまでの大学を中心とした実践と研究を踏まえて、高等学校・中学校・小学校・教員養成系の学部での授業などにおける実践・研究・教材開発が今後の課題である。

**多重知能理論アンケートの分析例**：詳細にわたって紹介・説明する紙幅がないが、森下美和・有賀三夏・原田康也・阪井和男・富田英司 (2018)\* によるセメスター留学前後の英語スコアの変化ならびに多重知能理論に基づくアンケート結果の分析例を下の図1に示す。

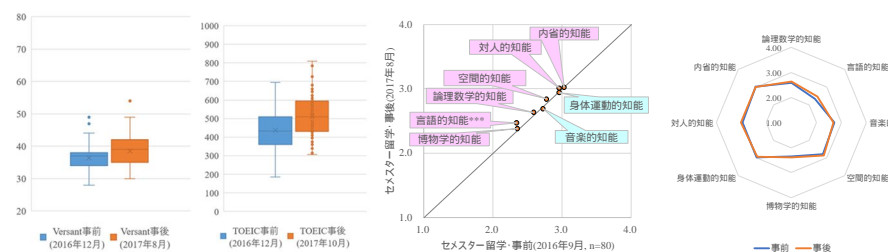


図1 Versant/TOEICの事前・事後の箱ひげ図・多重知能の事前事後・同レーダーチャート

\* 森下美和・有賀三夏・原田康也・阪井和男・富田英司 (2018) 「研修・留学等がもたらす行動変容・認識変容に関する効果測定指標の認知科学的検討」日本認知科学会第35回大会発表論文集, pp. 502-511, 2018年8月30日。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計24件（うち査読付論文 9件 / うち国際共著 2件 / うちオープンアクセス 8件）

1. 著者名 原田康也・平松裕子・森下美和・佐良木昌	4. 巻 119
2. 論文標題 Hot Sand と岩うつ波	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 電子情報通信学会技術報告	6. 最初と最後の頁 67 72
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 原田康也・平松裕子・森下美和	4. 巻 36
2. 論文標題 カタカナ語の英語学習に対する影響	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 日本認知科学会第36回大会発表論文集	6. 最初と最後の頁 508 516
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 原田康也	4. 巻 119
2. 論文標題 シロガネーゼ対おたかジェンヌ：カタカナ形態素おそるべし	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 電子情報通信学会技術報告	6. 最初と最後の頁 1 6
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 原田康也	4. 巻 -
2. 論文標題 外国語の言語処理の難しさを乗り越える：インタラクションの楽しさの気づき	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Proceedings シンポジウム「外国語学習者の言語情報処理の自動化プロセスをさぐる」 / 個別研究紹介 「外国語学習者の外国語運用能力はいかに熟達化するか」	6. 最初と最後の頁 14 17
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 原田康也・森下美和・鈴木正紀・横森大輔・遠藤智子・前坊香菜子・鍋井理沙・栗原奈な子・山田寛章・河村まゆみ	4. 巻 118
2. 論文標題 自律的相互学習の記録と分析からインタラクションの楽しさへ：外国語としての英語自動処理の難しさを超えて	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 電子情報通信学会技術報告	6. 最初と最後の頁 17 22
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 森下美和・原田康也	4. 巻 -
2. 論文標題 日本人英語学習者は未知の英語の食感形容詞を理解できるか？	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 日本認知科学会第35回大会発表論文集	6. 最初と最後の頁 274 277
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 森下美和・河村まゆみ・原田康也	4. 巻 117
2. 論文標題 英語母語話者とのインタラクションデータにおける日本人英語学習者のwh疑問文産出	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 電子情報通信学会技術報告	6. 最初と最後の頁 63 68
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 原田康也・森下美和・鈴木正紀	4. 巻 -
2. 論文標題 多様な英語力の測定	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 日本認知科学会第34回大会発表論文集	6. 最初と最後の頁 1124 1131
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 森下美和・原田康也	4. 巻 -
2. 論文標題 日本人英語学習者の構文産出傾向	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 日本認知科学会第34回大会発表論文集	6. 最初と最後の頁 1057 1060
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Morishita, M. & Harada, Y.	4. 巻 -
2. 論文標題 Syntactic Priming by Japanese EFL Learners in Dialogue Contexts based on Different Task Types	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 Proceedings of the 21st Workshop on the Semantics and Pragmatics of Dialogue	6. 最初と最後の頁 15 17
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 該当する

1. 著者名 Yasunari Harada	4. 巻 -
2. 論文標題 Building Frameworks for International Collaborations and Interactions in the Study of Language and Information for Humans and Machines	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 The teaching of Foreign Languages in Japan and International Academic Activities, Kazuko Sunaoka & Yoshiyuki Muroi (eds.)	6. 最初と最後の頁 43 52
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 原田康也	4. 巻 65
2. 論文標題 質問する教室を目指して	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 英語教育 2016年11月号	6. 最初と最後の頁 36 37
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -



1. 著者名 原田康也・森下美和	4. 巻 116
2. 論文標題 日本人英語学習者の応答練習における語彙的プライミング：自然なインタラクションにおけるプライミング効果	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 電子情報通信学会技術報告	6. 最初と最後の頁 133 137
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 原田康也	4. 巻 -
2. 論文標題 英語教育における研究と教育の統合：科学的英語学習法を目指して	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 全国英語教育学会第42回(統一体第16回)研究大会予稿集	6. 最初と最後の頁 426 429
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 鈴木正紀・森下美和・原田康也	4. 巻 116
2. 論文標題 言語技術の言語評価への応用：多様な英語能力の測定	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 電子情報通信学会技術報告	6. 最初と最後の頁 41 46
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 山下友子・冬野美晴・中島祥好・横森大輔	4. 巻 25
2. 論文標題 九州大学基幹教育における日本語科目・英語科目合同授業の試み：留学生と日本人学生の協働型言語学習活動の設計に向けて	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 九州大学留学生センター紀要	6. 最初と最後の頁 155 165
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 横森大輔	4. 巻 -
2. 論文標題 大学英语授業でのスピーキング活動における「非話し手」の振る舞いと参加の組織化	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 片岡邦好・池田佳子・秦かおり（編）『コミュニケーションを粹づける：参与・関与の不均衡と多様性』 くろしお出版	6. 最初と最後の頁 45 66
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 横森大輔	4. 巻 第36巻第4号
2. 論文標題 言い淀み・フィラー・母音延伸	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 日本語学	6. 最初と最後の頁 140 151
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 山下友子・冬野美晴・中島祥好・横森大輔	4. 巻 -
2. 論文標題 英語プレゼンテーションにおける発話時間長とポーズ時間長の定量的分析	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 統計数理研究所共同研究リポート389：マルチモーダルコーパスデータに基づくパブリックスピーチの統計的解析	6. 最初と最後の頁 37 52
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 原田康也・森下美和	4. 巻 115
2. 論文標題 日本人大学生英語学習者による疑問文の産出：平叙文・疑問文の再生と平叙文から疑問文への転換	5. 発行年 2015年
3. 雑誌名 電子情報通信学会技術報告	6. 最初と最後の頁 29 34
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Miwa Morishita & Yasunari Harada	4. 巻 32
2. 論文標題 Production of wh-questions by Japanese EFL learners: Preliminary classroom data collection	5. 発行年 2015年
3. 雑誌名 Linguistic Research	6. 最初と最後の頁 1 13
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1. 著者名 原田康也・森下美和	4. 巻 32
2. 論文標題 日本人英語学習者のインタラクション (相互行為) を通じた自律的相互学習プロセス解明に向けて	5. 発行年 2015年
3. 雑誌名 日本認知科学会第32回大会発表論文集	6. 最初と最後の頁 952 960
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 森下美和・原田康也	4. 巻 32
2. 論文標題 日本人英語学習者のwh 疑問文の知識と運用に関する調査: 習熟度の観点から	5. 発行年 2015年
3. 雑誌名 日本認知科学会第32回大会発表論文集	6. 最初と最後の頁 947 951
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 遠藤智子・横森大輔・河村まゆみ・原田康也	4. 巻 32
2. 論文標題 外国語としての英語スピーキング活動におけるメタ認知と聞き手の参与	5. 発行年 2015年
3. 雑誌名 日本認知科学会第32回大会発表論文集	6. 最初と最後の頁 940 946
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計91件（うち招待講演 11件 / うち国際学会 23件）

1. 発表者名 原田康也・平松裕子・森下美和・佐良木昌
2. 発表標題 「サンドイッチ」は「サンド」と省略しても "sandwich" を "sand" と省略してはいけない理由を考えてみた
3. 学会等名 日本英語教育学会・日本教育言語学会第50回年次研究集会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 原田康也・平松裕子・森下美和・佐良木昌
2. 発表標題 Hot Sand と岩うつ波
3. 学会等名 電子情報通信学会思考と言語研究会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 森下美和・原田康也
2. 発表標題 プライミングと英語学習
3. 学会等名 2019科研費合同研究集会@早稲田大学
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 原田康也
2. 発表標題 学習者対話データ収集用録音・録画機材の比較検討：ハードディスクレコーダ・ハンディカム+Bluetoothワイヤレスマイク・アクションカメラ・全天周カメラ+360度マイク
3. 学会等名 2019科研費合同研究集会@早稲田大学
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Yasunari Harada, Miwa Morishita, Yuko Hiramatsu and Masashi Saraki
2. 発表標題 What we should expect when a Japanese restaurant is offering "Hot Sands" and "Waves against a Rock"
3. 学会等名 WLLP-28 (2019/12): The 28th Joint Workshop on Linguistics and Language Processing (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 原田康也・平松裕子・森下美和・佐良木昌
2. 発表標題 ホットサンドを hot sand と英語に訳してはいけない理由
3. 学会等名 「言語・認識・表現」研究会第24回年次研究会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 原田康也・森下美和
2. 発表標題 インタラクティブを通じた外国語のオンライン・実時間学習：言語学習と芸術思考
3. 学会等名 第158回次世代大学教育研究会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Yasunari Harada & Miwa Morishita
2. 発表標題 Linguistic Landscapes of Heterotopia: from the Cyberpunk Imagery of 1980's to the City Views of Babel 2020
3. 学会等名 JWLLP-27 (2019/09): The 27th Joint Workshop on Linguistics and Language Processing (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 原田康也・平松裕子・森下美和
2. 発表標題 カタカナ語の英語学習に対する影響
3. 学会等名 日本認知科学会第36回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 原田康也
2. 発表標題 カタカナ語は統御可能か？
3. 学会等名 NPO ALR辞書プロジェクト会議第二期第十回会議
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 原田康也
2. 発表標題 シロガネーゼ対おたかジェンヌ：カタカナ形態素おそるべし
3. 学会等名 電子情報通信学会思考と言語研究会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 森下美和・原田康也・河村まゆみ
2. 発表標題 外国語学習の基盤としての意味のやりとり：自然なインタラクションにおける統語的プライミング効果
3. 学会等名 言語科学会第21回国際年次大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 原田康也・森下美和
2. 発表標題 インタラクションを通じた外国語のオンライン・実時間学習：語彙習得の前提条件
3. 学会等名 第155回次世代大学教育研究会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Yasunari Harada & Miwa Morishita
2. 発表標題 Invited Talk: Language Learning in Interaction: How can we Induce Real-time Learning through Mental Processing of Linguistic Information?
3. 学会等名 WLLP-26: The 26th Joint Workshop on Linguistics and Language Processing (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 原田康也・森下美和
2. 発表標題 インタラクションを通じた外国語のオンライン・実時間学習：統語学習の可能性
3. 学会等名 第153回次世代大学教育研究会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 原田康也・森下美和・鈴木正紀・横森大輔・遠藤智子・前坊香菜子・鍋井理沙・栗原奈な子・山田寛章・河村まゆみ
2. 発表標題 自律的相互学習の記録と分析からインタラクションの楽しさへ：外国語としての英語自動処理の難しさを超えて
3. 学会等名 電子情報通信学会思考と言語研究会・早稲田大学情報教育研究所共催研究会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 原田康也
2. 発表標題 外国語の言語処理の難しさを乗り越える：インタラクションの楽しさの気づき
3. 学会等名 日本ビジネスコミュニケーション学会2018年度第2回研究集会(ABCJ-2019/03)合同開催第152回次世代大学教育研究会(NextEdu-152)合同開催教育の国際化研究会(IE-2019/03)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Yasunari Harada
2. 発表標題 Adverse Effects of Loan Words in Japanese for Japanese Learners of English
3. 学会等名 the 54th RELC International Conference and 5th Asia-Pacific LSP and Professional Communication Association Conference (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 原田康也・柴原奈な子
2. 発表標題 360度全天球カメラ RICOH Theta V と 3Dマイクروفオン audio-technica TA-1 を応答練習の収録に利用する試み
3. 学会等名 日本英語教育学会・日本教育言語学会第49回年次研究集会：教えない教え方
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 遠藤美香・原田康也・森下美和
2. 発表標題 WH疑問文誤用例の通言語的比較研究：母語獲得を考慮した教授法に向けて
3. 学会等名 日本英語教育学会・日本教育言語学会第49回年次研究集会：教えない教え方
4. 発表年 2019年



1. 発表者名 原田康也
2. 発表標題 【招待講演】自律的相互学習の記録と分析からインタラクションの楽しさへ
3. 学会等名 日本英語教育学会・日本教育言語学会第49回年次研究集会：教えない教え方（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 原田康也・河村まゆみ
2. 発表標題 日本人大学生の英語インタラクションに発現するカタカナ語の影響
3. 学会等名 第150回次世代大学教育研究会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 原田康也・柴原奈な子・河村まゆみ・森下美和
2. 発表標題 相互作用の記録と分析からインタラクションの楽しさへ
3. 学会等名 2018科研費合同研究集会@早稲田大学
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 鍋井理沙・森下美和・原田康也
2. 発表標題 雇用現場で求められる実用的英語スピーキング能力にいかにも到達するか？：ディクトグロス書き起こしデータからの考察
3. 学会等名 2018科研費合同研究集会@早稲田大学
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 森下美和・原田康也
2. 発表標題 モノローグとダイアログにおける統語的プライミング
3. 学会等名 2018科研費合同研究集会@早稲田大学
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 原田康也・河村まゆみ
2. 発表標題 "Do you have my car?": カタカナ語がヤバイ
3. 学会等名 2018科研費合同研究集会@早稲田大学
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 原田康也
2. 発表標題 "I choiced this class because I want to improve my English.": カタカナ語の英語学習に対する影響
3. 学会等名 第149回次世代大学教育研究会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Miwa Morishita, Mayumi Kawamura & Yasunari Harada
2. 発表標題 Syntactic priming in interactions between a Japanese EFL learner and a native speaker of English
3. 学会等名 ICPEAL17-CLDC9, The 17th Conference on the Processing of East Asian Languages and The 9th Conference on Language, Discourse, and Cognition (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Lisa Nabei, Miwa Morishita & Yasunari Harada
2. 発表標題 Differences between self-noticing and interactional noticing through dictogloss activities
3. 学会等名 EuroSLA 28 (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 森下美和・原田康也
2. 発表標題 日本人英語学習者は未知の英語の食感形容詞を理解できるか？
3. 学会等名 日本認知科学会第35回大会 Organized Session 9 食文化の固有性・共通性から考える翻訳可能性：食感のオノマトペ・ワークショップを中心に (招待講演)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 原田康也
2. 発表標題 早稲田大学法学部の英語教育が目指すもの：英語が得意でない学生に単位を取得させる方法
3. 学会等名 National Geographic Learning 英語教育座談会 (招待講演)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Yasunari Harada
2. 発表標題 Featured Speaker Presentation: Preparing Students to Respond to and Formulate Meaningful and Interesting Questions in English: Developing Students' 21st century skills through interactions
3. 学会等名 2018 TESOL International Association China Assembly, English Education in China: Striding into a New Era (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Miwa Morishita & Yasunari Harada
2. 発表標題 How Repeated Exposure Influences Syntactic Processing by Japanese EFL Learners
3. 学会等名 The 16th Asia TEFL International Conference and The 6th Hong Kong Association for Applied Linguistics Conference and The 1st Macau Association for Applied Linguistics Conference (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Yasunari Harada & Miwa Morishita
2. 発表標題 Gaps in Education: discrepancy in knowledge vs performance
3. 学会等名 The 16th Asia TEFL International Conference and The 6th Hong Kong Association for Applied Linguistics Conference and The 1st Macau Association for Applied Linguistics Conference (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Lisa Nabei, Miwa Morishita & Yasunari Harada
2. 発表標題 Unstressed Elements in Listening Comprehension for Japanese Learners of English
3. 学会等名 The 16th Asia TEFL International Conference and The 6th Hong Kong Association for Applied Linguistics Conference and The 1st Macau Association for Applied Linguistics Conference (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 原田康也・森下美和
2. 発表標題 インタラクシオンと芸術思考：制約付き創発
3. 学会等名 第142回次世代大学教育研究会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Morishita, M. & Harada, Y.
2. 発表標題 Diversity of Tests and Test Scores of Japanese Learners of English
3. 学会等名 53rd RELC International Conference: 50 Years of English Language Teaching and Assessment? Reflections, Insights and Possibilities (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Harada, Y., Nabei, L. & Morishita, M.
2. 発表標題 Positive Impact of Intrusive Recording Devices on Foreign Language Learning
3. 学会等名 53rd RELC International Conference: 50 Years of English Language Teaching and Assessment? Reflections, Insights and Possibilities (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 原田康也
2. 発表標題 外国語学習における創発的推論
3. 学会等名 日本英語教育学会・日本教育言語学会第48回年次研究集会：英語学習を支える言語環境・言語景観
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 原田康也
2. 発表標題 言語表現の underspecification と言語理解におけるアブダクション
3. 学会等名 第139回次世代大学教育研究会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Nabei, L., Morishita, M. & Harada, Y.
2. 発表標題 Impact of Recording Devices on Students Performance in English Classes in Japanese Universities
3. 学会等名 JWLLP 23 (2017/12): The 23rd Joint Workshop on Linguistics and Language Processing jointly organized with the Fifth International Workshop on Linguistics of Ba (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Harada, Y., Morishita, M, Shudo, S. & Sakai, K.
2. 発表標題 Language Understanding and Abductive Reasoning: Abductive Reasoning in L2 English Dictation Tasks and in Interpreting L1 Japanese "NP1-no NP2" Constructions
3. 学会等名 JWLLP 23 (2017/12): The 23rd Joint Workshop on Linguistics and Language Processing jointly organized with the Fifth International Workshop on Linguistics of Ba (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 森下美和・河村まゆみ・原田康也
2. 発表標題 英語母語話者とのインタラクションデータにおける日本人英語学習者のwh疑問文産出
3. 学会等名 電子情報通信学会思考と言語研究会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 赤塚祐哉・原田康也
2. 発表標題 早稲田大学(法学部・本庄高等学院)での英語教育: 高大接続の可能性を含めた実践事例
3. 学会等名 Be The Teacher! 2017: Jr. & Sr. High School セミナー
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 原田康也・森下美和・鈴木正紀
2. 発表標題 多様な英語力の測定
3. 学会等名 日本認知科学会第34回大会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 森下美和・原田康也
2. 発表標題 日本人英語学習者の構文産出傾向
3. 学会等名 日本認知科学会第34回大会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Morishita, M. & Harada, Y.
2. 発表標題 Syntactic Priming by Japanese EFL Learners in Dialogue Contexts based on Different Task Types
3. 学会等名 SIGDIAL/SemDial 2017 (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 赤塚祐哉・家本修・阪井和男・坪田康・徳永健伸・原田哲男・原田康也・平畑奈美・八木智裕
2. 発表標題 【討議】英語による授業を可能とする教員の英語力・学生生徒の英語力
3. 学会等名 日本ビジネスコミュニケーション学会2017年度年次大会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 赤塚祐哉・原田康也
2. 発表標題 国際バカロレア「Language B(English)」評価・学習から捉える高校英語教育：高大接続に向けて
3. 学会等名 日本ビジネスコミュニケーション学会2017年度年次大会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 原田康也・阪井和男
2. 発表標題 「だれ場」の認知バイアス：いわゆる学習曲線における「プラトー」の解明と解消に向けて
3. 学会等名 日本ビジネスコミュニケーション学会2017年度年次大会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 鍋井理沙・原田康也
2. 発表標題 外国語学習の基盤としての意味のやりとり：創発としてのディクテーション訓練
3. 学会等名 日本ビジネスコミュニケーション学会2017年度年次大会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 坪田康・原田康也
2. 発表標題 外国語学習の基盤としての意味のやりとり：創発としての字幕付き映画聴解
3. 学会等名 日本ビジネスコミュニケーション学会2017年度年次大会
4. 発表年 2017年



1. 発表者名 原田康也
2. 発表標題 第二部：英語教育と情報教育はいかに統合されるべきか
3. 学会等名 立教大学英語教育研究所主催公開講演会（招待講演）
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 原田康也
2. 発表標題 第一部：教育の情報化は英語学習をどう変えたか
3. 学会等名 立教大学英語教育研究所主催公開講演会（招待講演）
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 原田康也・森下美和
2. 発表標題 外国語学習の基盤としての意味のやりとり：文の生成・産出・理解における演繹・帰納・創発
3. 学会等名 第130回次世代大学教育研究会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 原田康也・森下美和
2. 発表標題 外国語学習の基盤としての意味のやりとり：外国語学習における創造性・創発性
3. 学会等名 第129回次世代大学教育研究会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 横森大輔
2. 発表標題 グループ(ワーク)の創発とリスナーシップ
3. 学会等名 第129回次世代大学教育研究会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 原田康也・森下美和
2. 発表標題 外国語学習の基盤としての意味のやりとり：インタラクションなしの言語学習は可能か
3. 学会等名 第128回次世代大学教育研究会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Yasunari Harada, Miwa Morishita & Masanori Suzuki
2. 発表標題 Learning to Communicate in English through Interactions: Promoting and Prompting Japanese University Students to Ask and Answer Questions in English
3. 学会等名 日本英語教育学会・日本教育言語学会第47回年次研究集会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 遠藤智子・横森大輔・河村まゆみ・原田康也
2. 発表標題 ピア評価活動に対する学習者のメタ認知
3. 学会等名 日本英語教育学会・日本教育言語学会第47回年次研究集会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 横森大輔
2. 発表標題 聞き手行動としての情動表出：大学英語授業グループワークの分析から
3. 学会等名 やりとりの中の言語能力2017：外国語学習活動の評価・実践・データ分析をめぐって
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 山下友子・冬野美晴・横森大輔
2. 発表標題 日本人大学生の英語プレゼンテーションにおける主観的評価と音声の定量的分析
3. 学会等名 やりとりの中の言語能力2017：外国語学習活動の評価・実践・データ分析をめぐって
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 原田康也・河村まゆみ・森下美和
2. 発表標題 外国語学習の基盤としての意味のやりとり：小グループ発表と質疑応答におけるプライミングの解明に向けて
3. 学会等名 やりとりの中の言語能力2017：外国語学習活動の評価・実践・データ分析をめぐって
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 原田康也・森下美和
2. 発表標題 応答練習の書き起こしに見る語彙的プライミング
3. 学会等名 第126回次世代大学教育研究会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 原田康也・森下美和
2. 発表標題 日本人英語学習者の応答練習における語彙的プライミング：自然なインタラクションにおけるプライミング効果
3. 学会等名 電子情報通信学会思考と言語研究会・早稲田大学情報教育研究所共催研究会
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 森下美和・原田康也・富田英司
2. 発表標題 海外研修プログラムの効果：英語習熟度テストと意識調査をもとに
3. 学会等名 第124回次世代大学教育研究会
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 Yasunari Harada
2. 発表標題 Invited Paper: Measuring Diversified Proficiency of Japanese Learners of English
3. 学会等名 PACLIC 30 (2016): The 30th Pacific Asia Conference on Language, Information and Computation (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 山田明子・横森大輔
2. 発表標題 日本人大学生と留学生のインタラクションに関する教育実践とデータ分析：日本語使用時と英語使用時の比較に向けて
3. 学会等名 第121回次世代大学教育研究会
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 Yasunari Harada & Miwa Morishita
2. 発表標題 Reproduction and Elicited Production of English Question Sentences by Japanese EFL Learners
3. 学会等名 The 22nd AMLaP conference, Architectures and Mechanisms for Language Processing (国際学会)
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 Miwa Morishita, Franklin Chang & Yasunari Harada
2. 発表標題 How L2 Proficiency Interacts with Structural Priming in Japanese EFL Learners
3. 学会等名 The 22nd AMLaP conference, Architectures and Mechanisms for Language Processing (国際学会)
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 原田康也
2. 発表標題 【招待講演】英語教育における研究と教育の統合：科学的英語学習法を目指して
3. 学会等名 全国英語教育学会第42回(統一体第16回)研究大会(招待講演)
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 山下友子・冬野美晴・横森大輔
2. 発表標題 日本人大学生の英語プレゼンテーションにおける効果的な間の取り方
3. 学会等名 日本認知科学会研究分科会「間合い 時空間インタラクション」第5回研究会
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 原田哲男・原田康也・赤塚祐哉
2. 発表標題 【討議】英語学習の生涯接続：批判的思考力・表現力獲得のための英語学習
3. 学会等名 第119回次世代大学教育研究会・英語教育の国際化研究会
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 鈴木正紀・森下美和・原田康也
2. 発表標題 日本人大学生の英語知識と運用能力：言語知識と4技能の測定
3. 学会等名 第119回次世代大学教育研究会・英語教育の国際化研究会
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 鈴木正紀・森下美和・原田康也
2. 発表標題 言語技術の言語評価への応用：多様な英語能力の測定
3. 学会等名 電子情報通信学会言語理解とコミュニケーション研究会(NLC)研究会・思考と言語(TL)合同研究会思考と言語研究会
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 Masanori Suzuki, Miwa Morishita & Yasunari Harada
2. 発表標題 Application of language technology to language assessment: how different automated tests measure different aspects of language proficiency of Japanese learners of English
3. 学会等名 2016 International Joint Conference of English Linguistics Society of Korea and Korea Society of Language and Information (国際学会)
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 原田康也・森下美和
2. 発表標題 ウェアラブルカメラは何を視るか? : 日本人英語学習者のインタラクション(相互行為)を通じた自律的相互学習プロセス解明を目指して
3. 学会等名 第116回次世代大学教育研究会
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 原田康也・森下美和
2. 発表標題 街場の言語科学: 芸術思考とデータサイエンス
3. 学会等名 第115回次世代大学教育研究会
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 Yasunari Harada & Miwa Morishita
2. 発表標題 Promoting and Prompting Japanese University Students to Ask Questions in English Classes
3. 学会等名 the 51st RELC International Conference on Teaching Literacies: Emerging Pathways and Possibilities in Language Education (国際学会)
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 原田康也・森下美和
2. 発表標題 日本人英語学習者のインタラクション(相互行為)を通じた自律的相互学習プロセス解明を目指して: アクションカメラ・ウェアラブルカメラの選定と運用
3. 学会等名 日本英語教育学会第46回年次研究集会: 言語テストと高大接続(国際学会)
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 原田康也・鈴木正紀
2. 発表標題 多様な英語能力の測定：Versant English Test・Versant Writing Test・Oxford Quick Placement Test などからの知見
3. 学会等名 日本英語教育学会第46回年次研究集会：言語テストと高大接続
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 原田康也・森下美和
2. 発表標題 外国語でのインタラクション（やりとり）に見られる言語能力の創発と自律的相互学習
3. 学会等名 ワークショップ『やりとりの中の言語能力：外国語スピーキング活動の評価・実践・データ分析をめぐって』（招待講演）
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 横森大輔
2. 発表標題 グループワークでは何が起きているのか：授業内英語スピーキング活動の相互行為分析
3. 学会等名 第161回東アジア英語教育研究会
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 横森大輔
2. 発表標題 笑い・スマイル・無表情 英語授業内スピーキング活動における聞き手役学生の情動表出をめぐって
3. 学会等名 ラウンドテーブル『<聞く・聴く・訊く>こと - 聞き手行動の再考 - 』
4. 発表年 2016年



1. 発表者名 原田康也・森下美和
2. 発表標題 Production of English Question Sentences by Japanese EFL Learners: Reproduction of and Conversion into Question Sentences
3. 学会等名 電子情報通信学会思考と言語研究会・早稲田大学情報教育研究所・言語情報研究所共催研究会
4. 発表年 2015年

1. 発表者名 原田康也・森下美和
2. 発表標題 日本人英語学習者のインタラクション（相互行為）を通じた自律的相互学習プロセス解明に向けて
3. 学会等名 日本認知科学会第32回大会(0S10)オーガナイズドセッション：相互作用（インタラクション）を通じた英語の学習効果に関する認知科学的観点からの検討
4. 発表年 2015年

1. 発表者名 森下美和・原田康也
2. 発表標題 日本人英語学習者のwh 疑問文の知識と運用に関する調査：習熟度の観点から
3. 学会等名 日本認知科学会第32回大会(0S10)オーガナイズドセッション：相互作用（インタラクション）を通じた英語の学習効果に関する認知科学的観点からの検討
4. 発表年 2015年

1. 発表者名 遠藤智子・横森大輔・河村まゆみ・原田康也
2. 発表標題 外国語としての英語スピーキング活動におけるメタ認知と聞き手の参与
3. 学会等名 日本認知科学会第32回大会(0S10)オーガナイズドセッション：相互作用（インタラクション）を通じた英語の学習効果に関する認知科学的観点からの検討
4. 発表年 2015年

1. 発表者名 Miwa Morishita, Yasunari Harada & Franklin Chang
2. 発表標題 How L2 Proficiency Interacts with Implicit Learning in Structural Priming among Japanese EFL Learners
3. 学会等名 2015 EuroSLA Conference (国際学会)
4. 発表年 2015年

1. 発表者名 原田康也・首藤佐智子・森下美和
2. 発表標題 インタラクションを通じた自律的相互学習：マイクは発言者としての役割を自他に明示することで学習者の発言を促す
3. 学会等名 第107回次世代大学教育研究会
4. 発表年 2015年

1. 発表者名 Yasunari Harada & Miwa Morishita
2. 発表標題 Integration of research and learning in language learning: data collection and phonological loop enhancement
3. 学会等名 The 18th Korea-Japan Workshop on Linguistics and Language Processing (国際学会)
4. 発表年 2015年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 九州大学大学院言語文化研究院 学術英語テキスト編集委員会	4. 発行年 2016年
2. 出版社 研究社	5. 総ページ数 150
3. 書名 Authentic Reader: A Gateway to Academic English	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

## 6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	森下 美和  (Morishita Miwa)	神戸学院大学・グローバル・コミュニケーション学部・准教授  (34509)	2018年度・2019年度
研究協力者	東矢 光代  (Toya Mitsuyo)	琉球大学・国際地域創造学部・教授  (18001)	2018年度・2019年度
研究協力者	横森 大輔  (Yokomori Daisuke)	九州大学・言語文化研究院・准教授  (17102)	2018年度・2019年度
研究協力者	遠藤 智子  (Endo Tomoko)	東京大学・大学院総合文化研究科・准教授  (12601)	2018年度・2019年度 2018年度年度の所属・職位は 成蹊大学・講師
研究協力者	赤塚 祐哉  (Akatsuka Yuya)	早稲田大学・本庄高等学院・教諭	2016年度より2019年度まで
研究協力者	河村 まゆみ  (Kawamura Mayumi)		
研究協力者	栞原 奈な子  (Kuwahara Nanako)		
研究協力者	鈴木 正紀  (Masanori Suzuki)	Analytic Measures Inc., Test Development & Client Relations・Vice President	2018年11月までの所属・職位は Pearson Product Development and Test Delivery Director

## 6. 研究組織（つづき）

	氏名 (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
連携研究者	森下 美和 (Morishita Miwa)  (90512286)	神戸学院大学・グローバル・コミュニケーション学部・准教授  (34509)	2015年度より2017年度まで
連携研究者	東矢 光代 (Toya Mitsuyo)  (00295289)	琉球大学・法文学部・教授  (18001)	2015年度より2017年度まで
連携研究者	遠藤 智子 (Endo Tomoko)  (40724422)	成蹊大学・国際教育センター・講師  (32629)	2015年度より2017年度まで
連携研究者	横森 大輔 (Yokomori Daisuke)  (90723990)	九州大学・言語文化研究院・助教  (17102)	2015年度より2017年度まで 2017年度より准教授